



第37号(2025年春号)
発行日 2025年5月12日
信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター ニュースレター

巻頭言



【 変わりゆく教育の風景 】



この4月、平成30年改訂高等学校学習指導要領で学んだ学生たちが大学に入学してきました。大学は新教育課程で育った彼らへの対応の議論が始まったばかりですが、中央教育審議会ではすでに次の学習指導要領についての議論が始まっています。

この学習指導要領の変遷は、日本の教育の姿を映し出しているといえます。昭和33年版で学習指導要領は「告示」となり法的拘束力を持ち、学問の系統による基礎学力の充実が求められました。昭和43年版は「教育内容の現代化」とされ、教育内容の充実と科学教育が推進されました。昭和52年版は「教育の人間化」とされ、教育内容の精選を行ない「ゆとりある学校生活」の実現を目指しました。平成元年版は「自ら学び、自ら考える」新しい学力観が導入され、絶対評価になりました。平成10年版は「生きる力」の育成を掲げ、総合的な学習の時間が新設されましたが、「ゆとり教育」と揶揄されました。平成20年版は基礎学力の向上と思考力・判断力・表現力の育成が重視され、授業時数も増加し「脱ゆとり」とも言われました。そして、平成30年版は育成する資質・能力が明確化され、「主体的・対話的で深い学び」を通じて社会変化に対応できる力の育成が掲げられています。この変遷を見ると、能力開発型と知識技能習得型の間を振り子のように行き来していることがわかります。

新入生たちは「主体的な学び」を軸に、自ら課題を見出し、対話を通じて解決策を導き出すという教育課程で学んできました。彼らの授業への姿勢を観察すると、学校教育の成果と社会環境の影響が融合している様子が見て取れます。学習に対して前向きで、対話的活動にも意欲的です。しかし興味深いことに、彼らは主体的に進みながらも、教員の期待に沿っているか「忖度」し、承認を得てから再び活動するという特徴があります。

この背景には、学校教育において「主体的・対話的な学び」が、明確な到達点と可視化された評価を前提としていることがあります。さらに今日の「タイパ（時間効率）」「コスパ（費用対効果）」を重視する社会環境は、試行錯誤よりも失敗回避と連続した成功体験を優先させ、結果として「管理された主体性」を形成しています。

このような効率を重視する世代の学生たちと真の学びをどう両立させるのか、これは私たち全員が向き合うべき重要な課題といえます。彼らの特性を理解しながら、真の知的成長を促す「自律的な主体性」への移行を支援する教育環境の創造が重要といえるでしょう。

小山 茂喜（特任教授）





初級CST養成講座を振り返って (1)

令和6年12月7日（土）松本キャンパスにおいて、令和6年度初級CST認定修了審査会を開催しました。CST（Core Science Teacher）とは、理科教育の中核的役割を果たす教員で、信州大学と長野県教育委員会と共同で人材養成に取り組んでいます。2回にわたって、初級CST認定修了審査に挑戦したみなさんの感想を紹介します！

【畔上晃樹さん：理学部】

CST講座に参加して最もよかったことは、自身のスキルアップのためにさまざまなイベントに挑戦する目標を得ることができたことです。信州大学ではさまざまな先生方の協力もあり、小・中学校や地域の学習塾といった通常では体験できない学習支援に参加させていただくことができますが、大学生活を送る中でそういったイベントに参加する時間を作ることは少なからず負担となってしまうのではないかと不安があり、気後れしてしまう部分もありました。しかしながら、CST講座ではそれらのイベントに参加することでポイントを得られるという利点があることで、積極的に参加する目的を与えてくれました。結果的に、地域の学習支援に参加させていただいた経験は、大学の講義だけでは得られないような課題や学びの連続で、私にとってかけがえのない時間となりました。学習支援に参加するきっかけを与えてくれたCST講座には本当に感謝しています。また、CST講座には多くの学生が参加しており、自分と同じように教職を目指している仲間がいることはとても心強かったです。

審査会では、ベテランの先生方から具体的にためになるアドバイスをたくさんいただき、大変勉強になりました。たった十数分の授業でもたくさんの改善点を指摘いただき、まだまだ自分の至らなさを実感するとともに、いただいたアドバイスをもとにこれからもっと生徒が楽しく、積極的に学べるような授業をつくりたいと思うことができました。



【森本理斗さん：工学部】

生徒があれ？と思う事を拾いながら授業を作ることが重要で、先生の知識を教えるというよりも生徒と一緒に考えることが大切であると学んだ。また、わかっている生徒はついてこれても、わからない生徒は詰まってしまうとその疑問から次に進まずもういいやとなってしまうので、そこを無視して進めるのではなく、疑問を解決できるための支援となるアドバイスをきちんと行うことの必要性を感じた。そして、板書に関してはきれいきたないではなく見やすくなるように準備し、丁寧に行うことで生徒に伝わるということがわかったので、その意識を大切にしたい。

【荒川陽香：農学部】

修了審査会への参加を通して、より一層理科の教員になりたいという気持ちが強くなりました。私は、生徒達が自ら実験をしたい、謎を解き明かしたいと思う授業作りを心がけていました。今回の授業もそれに沿った授業が作れたと思っていました。しかし、審査員の先生方のお話から、理科が好きでわかっている人が作った授業であると気づかされました。自分の指導案を改めて見て、「どうやって書けばいいの？」「いきなりその条件でやるの？」などと小さな疑問を生徒に持たせてしまう授業であったと感じました。今後は、答えがもっと限定的になるような学習課題・問題を提示するよう心掛け、学習問題にたどり着くまでの段階的な実験順序をしっかりと吟味していきたいと思います。また、他の方の模擬授業やそれに対してのコメントを聞くことができ、とても勉強になりました。

私にとってCSTの活動は、理科の魅力を改めて感じ、授業を作るアイデアの溜まり場でした。また、普段はあまり接点がない他コースの仲間と意見を共有しながら、実験をする時間はとても楽しく、大切な時間でした。4年間参加したCSTの活動が理科を楽しむ礎になったと思います。



【八木澤懂子さん：農学部】

CSTに参加して、理科学習の教材研究・教材作成の力がついたこと、そして今回の終了審査会に参加できたことが非常に大きな収穫であった。高額な実験装置を使わずとも、工夫次第で学習課題を突き詰められると気づき、さらに自身と同じようにCSTに参加する仲間たちの視点や考えを吸収する良い機会であった。特に、修了審査会に参加できたことは、この講座で最大の収穫になった。教育現場に立つプロに自身の授業を評価してもらうという本当に貴重な体験であった。修了審査会で得た学びは、①授業の中では教師自身も「答えがわからない生徒」である必要があること、②学習課題は生徒たちの「あれ？なんでだろう？」を引き出してから適切に設定すること、③実験は「学習課題を解決するための手段」と捉えることである。①②について、私を含めた多くの受講生が「できる子に向けた授業」をやっているという指摘されていた。わかっている人（教師）が答えに辿り着かせるために敷いたレールに乗せる授業では、ついてこれない生徒が出てくるのも当然である。学習課題は教師が与えるものではなく、生徒から自然と湧き上がる疑問や好奇心に基づいて設定するべきである。先に事象の結果を見せ、「なぜこうなるのか？」という疑問を引き出し原理を学んでいく、という構成にしてもよかったのだと思った。③についても同様に、課題の設定を間違えると、生徒は何のためにその実験をしたのかわからないまま何も得ずに終わってしまう。「生徒に学んでほしいこと」を絶対の軸に、そこに「どうやって疑問に思わせようか」「それを解決するためにどんな実験をしようか」「どうやってまとめさせたら学びが定着するだろうか」と肉付けしていくと、目的迷子にならずに組み立てられると知った。

【三ツ井駿さん：工学部】

発表する中で、生徒ではなく自分が満足できる授業になってしまっていたと感じる。発表時間が少ない中全体を行おうとしたため、生徒が自分で考え話すといった流れをうまく伝えることができなかった。実際に学校で授業を行った際にも、生徒から出てくる意見は自分が出してほしい意見ではなかった。ただ、授業を行うためには今の自分の実力で正しそうな考察があったうえで、やってみたら本当にそうだったという授業しかできない。生徒に対して考察の際に誘導するのは今出ている考察の中には正解がないぞと言っているようなものでありあまり好ましくないように感じる。逆に、誘導をかけずそのまま授業を進めていくのは、生徒がこの実験を何のためにやっているかが分かりにくくなるものの、教科書にはない生徒から出た意見を解決するための実験を行うことで、生徒が「え？違うの？」という意外性を感じる授業にすることができる。臨機応変に授業を変更し、生徒が立てた考察をどう生かした授業にするかというのが教師としての実力につながってくるように感じた。

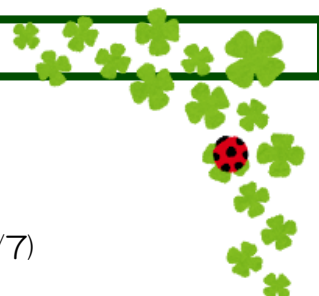
総合的にみて、今の自分には生徒の立場から考えてこの授業が面白いのか、集中できるのか、勉強が苦手な生徒がどこまで理解してついてこれるのか、完全に理解していなくても楽しい授業ではあるのかということに対する配慮が欠けていることが分かった。これに対しては何回も授業を行う中で生徒の反応を見ていくしかないが、実際に現場に出たらは生徒の様子を見る余裕のある授業を行いたい。

【古川萌乃さん：繊維学部】

CSTに参加して同級生の授業を見ることはとてもいい刺激になったと思った。なぜなら目上の先生方や指導教員の授業は見学することは多くあるが、同級生の授業を見学することは今までなかったからだ。また同級生の授業でのアドバイスは自分とも関係していることが多くとても参考になった。実験の授業でも生徒の主体性をどこまで尊重するかはかなり異なっていると感じた。プリントの作り方、実験の課題の提示の仕方など人によって違いがあり、同じ内容でも流れが違っただけで何を学ぶのかが変わってくると思った。教育委員会の方にも指摘された通り、わかっている人がしている授業と言われて確かにその通りだと思った。わからない人の気持ちに寄り添い、一緒に勉強をするという感覚をもって授業展開をすることが大切だと学べた。その意味では私は全然わからない人に寄り添ってなかったと感じたので、まだまだ授業作りは出来てないと思った。

教職支援センター3～4月の動き

- ・生坂村未来塾閉講式 (3/1) ・教職教育部会 (3/3)
- ・教職教育部会学芸員養成課程実施分科会 (3/5)
- ・小川村未来塾閉講式 (3/8) ・CST養成プログラム実施委員会 (3/10)
- 新入生教職ガイダンス (4/7)
- 各学部高年次生向け教職ガイダンス…人文学部(4/9), 理学部(4/9), 工学部(4/7)
農学部(4/3,8,16), 繊維学部(4/4)





【百田有志さん：農学部】

授業の完成度は練習通りにでき、時間管理もぴったりだったので満足のものであった。特に実践の部分で血糖を計算後からのコーラを飲んだ体がどうなるのかという発問、そして本時のねらいまでの導入は非常にうまく進んだと感じている。審査員の皆様とも積極的にコミュニケーションを取ることができ、多くのアドバイスやご意見をいただき非常に参考になった。

自分の授業での反省点、1つ目は、岡宮先生から指摘をいただいた発問の仕方についてである。「コーラをのむとどうなるか」という発問では、生徒はHappyになるなど授業の流れとは違う方向に進んでしまうが、「コーラを飲むと血糖値は果たしてどうなるのか」と少し言葉を付けたし、絞ってあげることで生徒のなかで上手くつながるとい部分は特に参考にしたいと感じた。2つ目は、実践で行った血糖量の計算である。血糖量を計算する過程で体重を用いることから生徒によっては計算もしたくない場合があるということはある程度考えていたので、自分自身の体重で計算をしてある程度の見本を見せるように工夫をしたが、授業プリントの方でも計算の欄を設けて、半強制的に計算をさせる形はよくなかったと感じた。もし、計算したい人はできるように小さくプリントにつけるくらいに変更した方がいいと思った。最後はその後の展開についてである。ホルモンの実際の働きについてのプリントの図を完成させる部分では、教科書を参考に穴埋めをしようと考えていたが、インスリン、グルカゴン、アドレナリンなどのホルモンが働いたあとのグラフを示し、それらからそれぞれの働きを予想して、プリントの穴埋めをする形でやってみたいと考えた。他の授業で、多くの先生に共通して指摘されていたのは、学習問題の部分である。学習問題と授業内容を繋げるために学習目標から逆算して授業作りをするのを心がけたいと感じた。



退職教員・新任教員について

「初級CST養成講座を振り返って」
は、次号に続きます。お楽しみに！

下澤秀夫先生、西牧守先生が、3月をもってご退職されました。

長年、学生相談や教科指導法を、担当していただきました。ありがとうございました。

これまで長野県内の高校現場で活躍されてきた志津千代子先生、藤江明雄先生が、後任として着任されました。

志津先生の専門は数学です。

藤江先生の専門は理科で、CSTに関わる指導もご担当いただきます。

○特任教授○

小松先生(理科)、小山先生(社会)

志津先生(数学)、櫻井先生(理科)

藤江先生(理科)よろしくお願いします！！



編集後記

新しく2名の特任教員が着任され、令和7年度が始まりました。桜の季節は短く、山々の雪解けが進む毎日。新入生たちも早く本学の環境に馴染んで、充実したキャンパスライフを送ってほしいと願っています。

(広報担当 橋本萌)

